

◆ 中央図書館の催し物 ◆

中央図書館では、企画展を開催しています。ぜひ期間中に図書館に足をお運びください。

- ▶ 場所：台東区立中央図書館(台東区西浅草3-25-16) 2階 郷土・資料調査室内 ゆかりの文学コーナー
 - ▶ 開館時間：月～土曜日 午前9時～午後8時、日曜日・祝日・12月29日・30日 午前9時～午後5時、1月3日 午前10時～午後5時
 - ▶ 休館日：毎月第3木曜日 12月31日・1月1日・1月2日
- お問合せ先：中央図書館郷土担当 ☎5246-5911

郷土・資料調査室 企画展 「吉原細見の世界Ⅱ」

吉原のガイドブック「吉原細見」には変化めまぐるしい、吉原の妓楼の場所、遊女や茶屋の名前などが記されています。本企画展では、吉原細見を用いて浮世絵を読み解きます。前期〔12月20日(金曜日)～1月15日(水曜日)〕、中期〔1月17日(金曜日)～2月19日(水曜日)〕、後期〔2月21日(金曜日)～3月15日(日曜日)〕で展示替えをしますので、それぞれお楽しみください。

●企画展に関連して、専門員によるイベントも開催いたします。

●トーク・イベント

・内容(①②共通)：複数の講師が、それぞれの視点から吉原細見資料についてお話しします。

①「吉原細見の周辺」

I「吉原細見と浮世絵」

II「吉原の本屋 蔦屋重三郎」

- ・日時：令和2年1月26日(日曜日) 午後2時～4時
- ・講師：I 平野 恵(当館郷土・資料調査室専門員)
- II 鈴木 俊幸(中央大学文学部教授)
- ・申込締切：令和2年1月15日(水曜日) 午後5時

②「資料館・図書館と吉原」

I「江戸風俗人形」と下町風俗資料館」

II「郷土・資料調査室の和本と浮世絵」

III ブックトーク「吉原を知る」開架図書にて

- ・日時：令和2年2月16日(日曜日) 午後2時～4時
- ・講師：I 本田 弘子(台東区立下町風俗資料館研究員)
- II 平野 恵(当館郷土・資料調査室専門員)
- III 児玉 ひろ美(当館司書)
- ・申込締切：令和2年2月5日(水曜日) 午後5時

・会場(①②共通)：台東区生涯学習センター 301研修室

・定員(①②共通)：90名(応募多数の場合は抽選)

・申込(①②共通)：往復はがき(1人1枚)に「トーク・イベント①または②」・氏名・住所・電話番号をご記入のうえ、上記へ送付。または、台東区立図書館ホームページから申込。

●専門員によるギャラリー・トーク

- ・内容：展示品の見どころを直接展示会場で解説。
 - ・日時：令和2年3月8日(日曜日) 午後4時15分～4時45分
 - ・会場：台東区立中央図書館 2階郷土・資料調査室
 - ・定員：先着20名
 - ・申込：事前に直接来館の上申込み(2階カウンター)。または、電話での申込み。
- ※詳しくは広報たいとうや台東区立図書館ホームページをご覧ください。



懐かしの写真 連載

『大晦日の仲見世』 昭和55.12.31



大晦日の浅草仲見世を写した写真です。中央には縁起物の羽子板が大きく掲げられています。それぞれの店舗には正月飾りである繭玉が伸びており、お正月に向けての準備が進んでいます。仲見世は初詣で浅草寺を訪れる人で溢れ返ります。撮影：高相嘉男氏

※今回の写真は、中央図書館で閲覧できるほか中央図書館ホームページでも公開しています。ぜひご覧ください。

連載 子供に聞かせたい、こんな話 その29

上野の世界遺産はこの人から始まる

― 松方幸次郎 ― 後編

こころざし高く

幸次郎は、国外に流出した浮世絵を買い戻します。

幸次郎が美術品を扱うにあたっては、いつも余裕があった訳ではありませんでした。会社の経営が苦しい時でも、なんとかお金を工面して、美術品を買い続けました。経営がうまくいかない時には、美術品の一部を銀行に差し押さえられて売却されたこともありました。美術品のうちの一部は、第二次世界大戦中に火災にあい、海外で消失した作品もあります。戦争が終わった時には、「松方コレクション」と呼ばれる美術品のうちの数多くがフランスに残されました。

フランス政府は、美術品を敗戦国の国民が所有する財産であるため、日本に返しませんでした。しかし、当時の吉田首相をはじめ多くの人たちが返還の運動をしました。そしてフランスのド・ゴール大統領が日本に返すことを許可し、「松方コレクション」が日本に帰ることになりました。日本に引き渡すにあたり、美術館を作り、そこに作品を納めるという条件が出されました。そこで、上野の森に美術館を建てることになったのです。

ところが、終戦直後で、国民も国も貧しかったため、文化事業に回せるお金がなかったのです。文部省(現文部科学省)の予算では一億五千万円(現在の六十億円くらい)が必要でしたが、当初国が実際に用意したのは五百万円でした。こうした中、政治家や実業家たちの間で、「松方コレクション」のための美術館建設の声が高まりました。

芸術家たちも、作品を創作して提供するなどで寄付を募って協力するなど、多くの人たちの努力で、一億円を超える寄付が集まりました。このような運動の高まりに応じて、国は建築費五千万円を出すことを決めました。設計はフランスの有名な建築家ル・コルビュジエに依頼しました。こうして、美術館が完成したのです。国立西洋美術館ができたおかげで、幸次郎のたくさんの収集品を、日本の国民が鑑賞することができるようになりました。その後、フランスの作品が中心だった「松方コレクション」だけでなく、西欧の古い美術作品も購入し、国民に広く文化を紹介する場となりました。

幸次郎は、戦争後、政治や経営の表舞台から身を引き、八十四歳で亡くなりました。しかし、松方幸次郎とその思いを実現した多くの人たちの願いは、今でも私たちに届いているのです。



【出典】「火輪の海 松方幸次郎とその時代 復刻版(新装)」 神戸新聞社二〇〇七年

【監修】国立西洋美術館

※出典を参考文献として文章を構成しています。中学校一〜三年生用「こころざし」教育副読本に掲載

お問合せ先：教育支援館

☎5246-5921